

< 国語 >

読解力を育成する学習指導の工夫
～ 説明文における言語事項を中心とした展開を通して～

長田小学校教諭 座間味 聖子

目 次

テーマ設定の理由	4 1
研究目標	4 1
研究仮説	4 1
研究の全体構想図	4 2
研究内容	
1 読解力の育成について	4 3
2 言語事項の充実について	4 5
3 言語事項と説明文を関連させた学習の展開について	4 6
4 発問の役割と工夫	4 7
検証授業	
1 単元名	4 8
2 教材名	4 8
3 単元の目標	4 8
4 単元について	4 8
5 指導計画	5 0
6 本時の指導	5 2
7 検証授業研究会	5 4
仮説の検証	
1 具体仮説 の検証	5 5
2 具体仮説 の検証	5 8
3 事前事後の実態調査から	5 9
研究の成果と今後の課題	
1 研究の成果	6 0
2 今後の課題	6 0
3 おわりに	6 0
< 主な参考文献 >	

読解力を育成する学習指導の工夫

～ 説明文における言語事項を中心とした展開を通して～

長田小学校教諭 座間味 聖子

テーマ設定の理由

平成 20 年 3 月に告示された「新学習指導要領」では特に国語力の育成が重視されている。OECD(経済協力開発機構) が実施した国際的な学習到達度調査 (PISA) では、日本の子どもたちの「読解力」等に課題がみられた。その課題は中央審議会において大きく取り上げられ「読解力」の育成は学習指導要領改訂の柱の一つとなっている。その課題をふまえて、国語科改善の基本方針では、特に「言葉を通して的確に理解する」「論理的に思考し表現する能力」「互いの立場を考えて尊重して言葉で伝え合う能力」の育成が図れるよう「言語の教育」としての立場を一層重視している。

つまり、その言語に関する能力が実生活で生きて働くように言語活動を充実させ、国語科の目標の実現を図ることが求められている。また、「現行の言語事項の内容のうち各領域の内容に関連の深いものについては、実際の言語活動において一層有機的に働くよう、それぞれの領域の内容に位置付けるとともに、必要に応じてまとめて取り上げるようにする」とある。そこで授業展開においては、その活動が、国語科や単元の目標達成に有効に働くものであるか、これからの学力の中核をなす思考力・判断力・表現力などの育成につながるものであるか等の吟味・充実が重要だと考える。

本学級の児童の実態としては、説明文を読み取る力が弱い状況がある。それでも既習学習の説明文は、読み慣れていることもあり、正答率は上がるが、類似問題を使ってチャレンジさせると正答率は低い。すなわち、「読むこと」の目標である「内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力」を身に付けたとはいえない現状である。これまでの授業を振り返ってみると、各段落の読み取りや作者の伝えたいことが理解されていない場合も多いように思う。また、説明文で重要な働きをする「接続語」等の言語事項の意味や用法等のおさえが弱く、正確に読み取る力や深く読み取る力を身に付ける授業展開には至っていなかったといえる。そのため、全体的に学習の深まりが弱く、説明文の内容が変わると応用ができないという実態になっていたと思われる。

本研究では、言語事項の「文と文とのつながり」の学習を説明文の単元「アップとルーズで伝える」の中に組み込んで学習を展開する。そこで、指示語や接続語等の言語事項に着目した授業展開を工夫することにより、内容の中心をとらえたり、段落相互の関係を考えたりしながら読むことができ読解力が育成されると考え本テーマを設定した。

研究目標

読解力を育成する学習指導の在り方を探る。

研究仮説

1 基本仮説

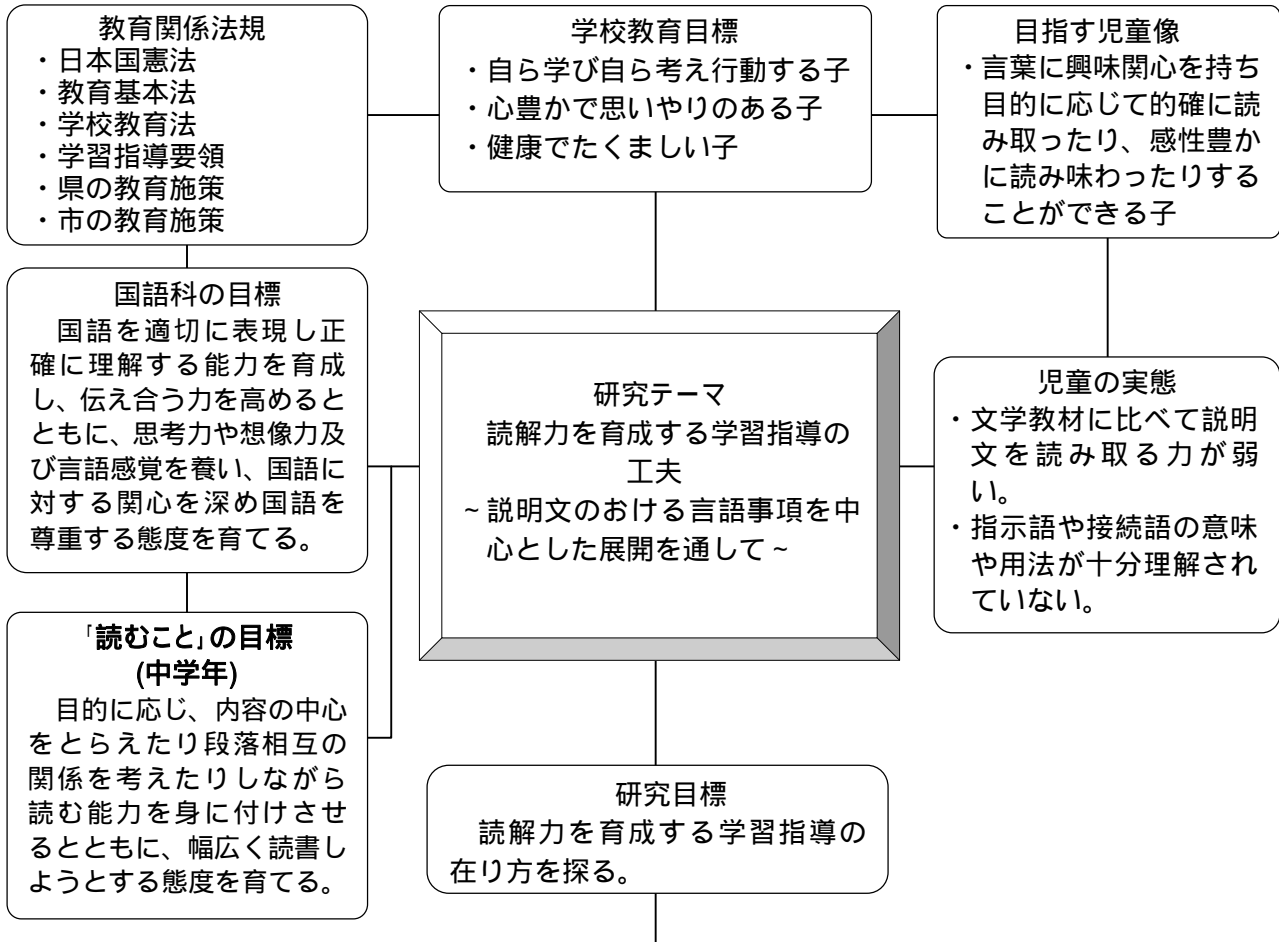
説明文の単元『アップとルーズで伝える』の学習において、言語事項『文と文のつながり』の学習を組み込んで授業を工夫することにより、指示語や接続語等の言語事項の視点から段落相互の関係をとらえることができ、読解力が育成されるであろう。

(1) 具体仮説

文や段落相互の関係をとらえる場面で、言語事項の意味や用法を具体的な文章の中で重点的に扱うことにより、文章や段落の確かな読み取りが行われ、文や段落相互の関係やつながりを考えながら読むことができるであろう。

筆者の考えをとらえる場面で、一人一人がワークシートに筆者の考えを書いて相互交流を行うことにより、多様な他者との考えに出会い、筆者の論理や考えを読み取ることができるであろう。

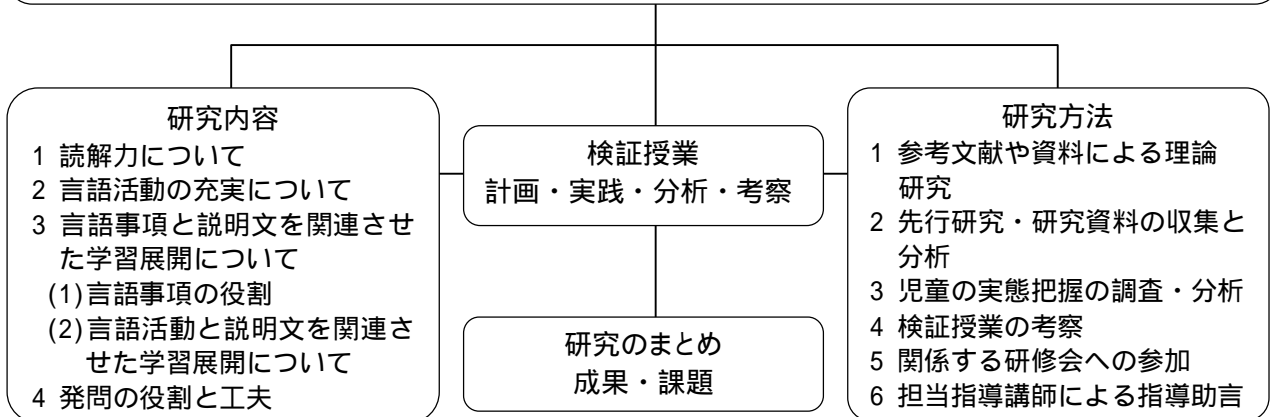
研究の全体構想図



研究仮説

1 基本仮説
 説明文の単元『アップとルーズで伝える』の学習において、言語事項『文と文のつながり』の学習を組み込んで授業を工夫することにより、指示語や接続語等の言語事項の視点から段落相互の関係をとらえることができ、読解力が育成されるであろう。

(1) 具体仮説
 文や段落相互の関係をとらえる場面で、言語事項の意味や用法を具体的な文章の中で重点的に扱うことにより、文章や段落の確かな読み取りが行われ、文や段落相互の関係やつながりを考えながら読むことができるであろう。
 筆者の考えをとらえる場面で、一人一人がワークシートに筆者の考えを書いて相互交流を行うことにより多様な他者との考えに出会い、筆者の論理や考えを読み取ることができるであろう。



研究内容

1 読解力の育成について

(1) 読解力について

小学校学習指導要領国語科では、PISA 型読解力の低下等の課題を受けて、「実生活で生きて働き、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けさせること」を改訂の基本方針に示している。PISA 型読解力とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟読する能力」と定義されている。

河野庸介(2008)は、「これまでの国語科教育では、『読むこと』の指導は、どちらかという给与られた文章の内容をいかに正確に理解するのかという点に主眼が置かれてすぎていた。「PISA 型読解力に対応できる「読解力」を育成するという観点から、この情報を正確に取り出すこと(情報の取り出し)だけでは不十分であり、当該文章の内容がどのような意味をもつかを理解したり推論したり(テキストの解釈)、あるいは書かれていることを生徒の知識や考え方、経験と結び付けて考えたり判断したり(熟考・評価)する学習指導が求められることになる。」と述べている。

鶴田清司(2008)は、「読解力」について、「これからは、『何がかけられているか』だけでなく『いかに書かれているか』という観点から、読者(自分)との関わりで表現の工夫や効果を考えるような学習課題を重視すべきである。まさに《批評》の学習である。」と述べている。批評とは、筆者のものの見方・考え方、さらに表し方・述べ方について批評的に読むことであり、これによって、筆者の文章構成やレトリックを学んで、自分の文章表現に生かすという道も開けてくる(読み書き関連指導)。

特に、説明的文章の場合、「内容を読み取る力を育てるだけでなく、そこで使われている構成や表現の方法をモデルにして自分の文章にも生かすようにする」という学習のねらいを持ち合わせていることから、説明文で、論理的な思考力・表現力を育てると共に読解力を育成するために、「読むこと」の領域を核として位置づけ、説明文における授業課題の改善を図る取り組みを行うこととする。

(2) 読解力を育成する「読むこと」の目標及び内容について

「読むこと」の目標

読解力の育成と「読むこと」の領域が密接な関係であると捉えると、学習指導要領における「読むこと」の目標に迫ることが読解力を育成することにつながると考えられる。「読むこと」に関する目標は、「読む能力」と「読書態度」に関する目標に分けて構成されている。実生活の様々な機会や場面における目的に応じて、多様な本や文章、その他の資料を効果的な読み方を工夫して読み、読んだ内容や形式に関する情報を活用する能力や態度を育成しようとしている。寺井正憲(2008)は、「目的に応じるためには、第3, 4 学年では、『何のために読むのか』『読んでどう活用するか』等の目的を明確にすることを大切にしたい。」と述べている。これらの目標は児童の発達段階や中学校との関連を配慮しつつ学校や児童の実態に応じて指導内容を重点化し定着を図るという観点から、2 学年まとめて示されている。

これらのことから、「読むこと」の領域は「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の各領域と相互に密接な関連性があり、調和的に指導を行う必要がある(表1)。

表1 各学年における各領域の目標

		第1学年・第2学年	第3学年・第4学年	第5学年・第6学年
読むこと	聞くこと	相手に応じ、事柄の順序を考えながら話す能力、大事なことを落とさないように聞く能力	相手や目的に応じ、筋道を立てて話す能力、話の中心に気を付けて聞く能力	目的や意図に応じ、的確に話す能力、相手の意図をつかみながら聞く能力
	と書くこと	順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身に付けさせる。	相手や目的に応じ、段落相互の関係などに注意して文章を書く能力を身に付けさせる。	目的や意図に応じ、文章全体の構成の効果を考えて文章に書く能力を身に付けさせる。
読むこと	能力読む	書かれている事柄の順序に気付く能力を身に付けさせる。	目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身に付けさせる。	目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身に付けさせる。
	態度読書	楽しんで読書しようとする態度を育てる。	幅広く読書しようとする態度を育てる。	読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。

「読むこと」の指導事項

「読むこと」の領域では、音読や解釈、自分の考えの形成及び交流、目的に応じた読書という学習過程を示し、学習過程全体が分かるように内容が構成されている。この過程は、PISA型読解力の思考過程とも重なるものであり、自分の考えをもち、表現したり交流したりする能力を重視されるものとなっている。さらに、本領域の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、能力の定着を図ることを基本としている。

本研究における授業実践においてもその系統性を重視し、学習指導要領解説国語編（平成20年）に明記されている「読むこと」の指導事項を重視した取り組みを行いたい（表2）。

表2 各学年における「C読むこと」の指導事項

	第1学年・第2学年	第3学年・第4学年	第5学年・第6学年
音読に関する指導事項	語のまとまりや言葉の響きなどに気をつけて音読	内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読	自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読
効果的な読み方に関する指導事項			目的に応じて、本や文章を効果的に読む工夫（比べ読み・速読・摘読・多読など）
説明的な文章の解釈に関する指導事項	時間的な順序や事柄の順序等を考えながら内容の大体を読む <キーワード> ・ 時間の順序 ・ 事柄の順序 ・ 内容の大体	目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を読む 事実と意見との関係を考え、文章を読む <キーワード> ・ 中心となる語 ・ 中心となる文 ・ 段落相互の関係 ・ 事実と意見との関係	目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえながら読む 事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読む <キーワード> ・ 要旨 ・ 事実と感想、意見との関係 ・ 自分の考えを確立
自分の考えの形成及び交流に関する指導事項	文章の中の大事な言葉や文を書き抜く。 文章の内容と自分の経験と結び付ける。 自分の思いや考えをまとめ、発表し合う。	文章の要点や細かい点に注意しながら読む。 文章などを引用、要約する。 文章を読んで考えたことを発表し合う。 一人一人の感じ方に違いがあることに気づく。	 本や文章を読んで考えたことを発表し合う。 自分の考えを広げたり深めたりする。
目的に応じた読書	楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読む	目的に応じて、いろいろな本や文章を読む	目的に応じて、複数の本や文章などを選んで比べて読む

上記の「説明的文章の解釈に関する指導事項」の「文章の解釈」とは、本や文章に書かれた内容や表現を相互に関連付けたり、今までの知識や経験と照らしたりしながら、想像や分析、比較や推論などの思考を働かせて意味を理解することである。

2 言語活動の充実について

言語活動の充実とは、指導事項達成のための有力な手段として働きつつ、同時にその活動を行うことによって日常的な場面において言語を活用する力がいっそう高められるところに、言語活動を充実させることの意味がある。

学習指導要領解説国語編では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域で、国語の能力を調和的に育て実生活で生きて働くように、それぞれの領域の特性を生かしながら児童主体の『言語活動』を活発にするとともに、国語科の目標を確実に豊かに実現できるように内容を改善している。このことから、各領域において基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることができるよう、言語活動を工夫し、その充実を図ることが重要であるといえよう。各領域の言語事項例は、下記の表3の通りである。

表3 各学年の言語活動例

	第1学年・2学年	第3学年・4学年	第5学年・第6学年
話すこと・聞くこと	<ul style="list-style-type: none"> ・事物の説明や経験の報告をしたり、それらを聞いて感想を述べたりする。 ・尋ねたり応答したり、グループで話し合っって考えをひとつにまとめたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・出来事の説明や調査の報告をしたり、それらを聞いて意見を述べたりする。 ・図表や絵、写真などから読み取ったことを基に話したり、聞いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・資料を提示しながら説明や報告をしたり、それらを聞いて助言や提案をしたりする。 ・調べたことやまとめたことについて、討論などをする。
書くこと	<ul style="list-style-type: none"> ・経験したことを報告する文章や観察したことを記録する文章を書く。 ・身近な事物を簡単に説明する文章などを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・疑問に思ったことを調べて報告する文章を書いたり、学級新聞などに表したりする。 ・収集した資料を効果的に使い説明する文章などを書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の課題について調べ意見を記述した文章や活動を報告した文章などを書いたり編集したりする。
読むこと	<ul style="list-style-type: none"> ・事物の仕組みなどについて説明した本や文章を読む。 ・読んだ本について、識名ところを紹介する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・記録や報告の文章、図鑑や事典などを読んで利用する。 ・必要な情報を得るために、読んだ内容に関連した他の本や文章を読む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の課題を解決するために、意見を述べた文章や解説の文章などを利用すること。 ・編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読む。

小森茂氏（2008）は、読解力と言語活動の関係について「読解力を育成するには、誰に対して、何のために話したり、聞いたり、書いたり、読んだりするのか等の学習意識が重要である。その学習意識を確立することで、『言語活動の充実』も具体化できるし、他教科学習や総合的な学習の時間でも活用したり、応用したりできる言語能力を育成することができる。」と述べている。

つまり、「相手意識」「目的意識」「場面意識」「方法意識」「評価意識」の学習意識を明確化することは、言語活動を単なる言語操作に陥らせることなく言語の能力を育成していくことになるということになる（表4）。

そこで、指導内容と言語活動との関連を図り、児童の主体的な学習活動を促しながら学習の効果を上げるために、各領域の言語活動例を効果的に活用し、相手や目的に応じて適切に話したり聞いたりする活動、相手や目的に応じて適切に書く活動、目的に応じて的確に読み取る活動の3領域からの活動を意識的に取り入れ、言語活動の充実を図っていきたい。

表4 活動における学習意識

目的意識（何のための言語活動か）
相手意識（誰に向けた言語活動か）
場面意識（どんな場面、状況か）
方法意識（どのようにすべきか）

3 言語事項と説明文を関連させた学習の展開について

(1) 言語事項の役割

新学習指導要領では、言語事項の指導について「現行の言語事項の内容のうち各領域の内容に関連の深いものについては、実際の言語活動において一層有機的に働くよう、それぞれの領域の内容に位置付けるとともに、必要に応じてまとめて取り上げるようにする」と明記されている。小森茂（2008）は、[言語事項]の位置づけに対して、「従来より格上げされたことになり、その内容や方法等を『本時の学習指導案』等に具体的に反映されることはもちろん、評価することになる。」と述べていることから、学習指導の中で言語事項の取り扱い方をより重視していくことが大切であるといえよう。

瀬川榮志（2007）は、「理解力の基礎的スキルは言語事項である。文脈に沿った語句の読み取り方、接続語・指示語のとらえ方、敬語のとらえ方等、理解力の基礎となる力を取り上げ、定着させる指導を行っておかないと、いつまでたっても、国語科では読みの力を養っていないと指摘される結果となる。」と述べている。また、「単に物語を読ませたり、説明文を読ませたりする活動を行うのみでは、それらの文種を読む活動を通して、その学年としておさえるべき基本的能力とは何かも明らかにはならない。」と指摘している。つまり、文や文章の構成を知ること（言語事項）で文章全体から大事な事をつかめるようになり、関連したほかの文章を読むこと（言語活動例）も可能になると考える。そのような力が積み重なり、他教科等の学習や日常生活においても生きて働く力となるといえる。

(2) 言語事項と説明文を関連させた学習指導について

説明文の読み方として、青山由紀（2008）は、「筆者の主張している事柄の要点をつかむこと」「接続語を手がかりに、文や段落相互の関わりをとらえること」「事実と意見を考えて読むこと」「文や段落相互の関係に注目しながら、書かれている内容を読み取ること」「段落の役割を理解し、意味段落をとらえて読むこと」等をあげている。このように、言語事項は説明文の中で重要な働きをしており、論理的な文章を書いたり話したりする能力を高める要素がある。よって、言語事項における接続語などの意味や用法（働き）を重点的に扱い、活用する活動による内容の理解・習得は、国語の授業のなかで重要だと考える。そのため、説明文を読み取るための方法を習得させ、その方法を活用して、自分の力で、文章を読めるようにすることが生きた言語活動であり、読解力の育成につながると思う。

そこで、本研究では、指導計画の作成において、言語事項の学習を説明文の単元に工夫して組み込み、指示語や接続語等の言語事項を中心においた学習展開を行うこととする。

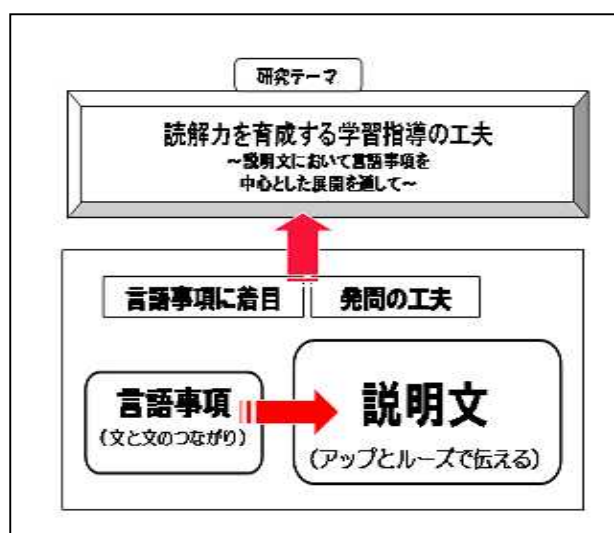


図1 言語事項と説明文の関連づけた授業モデル

(3) 言語事項の系統的な指導事項について

小学校学習指導要領国語科は、これまで「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域及び[言語事項]で内容を構成していたが、3領域と[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]に改めている。[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]の中にある、現行の言語事項に関連する「言葉の特徴やきまりに関する事項」の指導については、「系統的に指導するとともに、実際に文章に書いたり、読んだりするときなどに役立つよう指導の改善を図る。」とある。

そこで、授業における言語事項の重点化を図り、実際の言語活動において有機的に働くような能力を育てるため、各学年の指導内容についての系統を以下に表す（表5）。

表5 各学年における言葉の特徴やきまりに関する事項

	第1学年・第2学年	第3学年・第4学年	第5学年・第6学年
する事項 言葉の働きや特徴に関	(ア)事物の内容を表す働き・経験したことを伝える働き (イ)音節文字との関係・アクセントによる語の意味の違い (ウ)語句のまとまり	(ア)考えたことや思ったことを表す働き (イ)漢字と仮名を用いた表記	(ア)話し言葉と書き言葉の違い (イ)言葉の変化、世代による言葉の違い
項 表記に関する事	(エ)長音、抑音、促音、撥音などの表記「は」「へ」「を」の正しい使い方 (オ)句読点の打ち方、「」の使い方	(ウ)送り仮名の使い方、活用の仕方 (エ)句読点、改行	(ウ)送り仮名、仮名遣い
る事項 語句に関す		(オ)語句の類別 (カ)辞書利用で語句調べ	(エ)語句の構成、語句の由来 (オ)語句と語句との関係 (カ)語感、言葉の使い方
の文・文章 構成	(カ)主語と述語の関係	(キ)修飾と被修飾との関係(文の構成) (ク)指示語・接続語	(キ)文や文章の構成
夫 表現の工 言葉遣い	(キ)敬体の文章		(ク)敬語の使い方 (ケ)比喩、反復

言葉のきまりの指導、つまり、言語事項の指導においても、螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し、能力の定着を図っていく必要がある。そのため、児童の実態に応じ、各領域の指導事項及び言語活動例、さらには「言語事項」を関連付けながら重点を置くべき指導内容を明確にし、その系統化を図っていきたい。

4 発問の役割と工夫

発問は教師が学習活動を促すために、児童に対して発する質問である。学級の実態に即しながら、より深い思考を促す発問は、意欲的な学習活動を展開させる要因ともなる。

瀬川榮志は、発問について、「主体的、創造的な思考を促す発問は、正しい児童理解と深い教材研究から生まれる。」と述べている。授業の展開からそれることなく、思考を開発し発問相互の関連を保ち新鮮で学習意欲をかき立てるものになるよう発問を大事に扱いたい。

さらに、言語の活用力を育てるための発問の工夫として有元秀文氏は、「その発問に答えることで、教材文のよさや本質を理解できる、大づかみで教材の核心をついた重要な発問」「教材文全体を大づかみにとらえていないと答えられない発問」「教材文に書いてあることを正確に理解した上で、書いてあることを根拠にしないと答えられない発問」等をあげている。

つまり、「前後数段を読めば答えられるような発問」ではなく、「教材全体を始めから終わりまで繰り返し読み返す必要がある。」といった発問が意図的に行えるよう、発問づくりに着目してみたい。

国語科学習指導案

日 時：平成 22 年 1 月 19 日（火）第 5 校時

学 級：宜野湾市立長田小学校 4 年 3 組

男子 14 名 女子 15 名 計 29 名

指導者：座間味 聖子

講 師：吉浜 幸雅

- 1 単元名 材料の選び方を考えよう
- 2 教材名 アップとルーズで伝える/文と文のつながり
- 3 単元目標 中心となる語や文、接続語、指示語、段落、段落相互の関係に注意して読む。
伝えることと伝える方法について興味をもつ。

4 単元について

(1) 教材観

本教材は、学習指導要領「C 読むこと」の説明的な文章の解釈に関する指導事項「イ 目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を読むこと。」をねらいとした教材である。

第一教材「アップとルーズで伝える」は、テレビや新聞などを通して私たちに届けられる映像や写真が、送り手の目的や意図に基づいて取捨選択されたものであることを基本的な映像の技法である「アップ」と「ルーズ」を通して考えさせていく説明文である。

私たちがよく目にしているメディアであるテレビの映像技法を中心に述べたもので、児童にも身近に感じられる内容であり、実際に確かめることも容易である。また、アップとルーズについて対比的にわかりやすく述べられており、段落構成、キーセンテンスやキーワード、要約などの学習にも適している、読む力をはぐくむ教材としても十分な内容をもったものとなっている。

文章は、8つの形式段落からなり、大きく三つのまとまりで構成されている。問題提起（形式段落 ）では、「アップ」と「ルーズ」の画面の特徴からそれぞれの定義が述べられ、「どんなちがいがあるか。」という問題を投げかけている。説明（形式段落 ）では、「アップ」と「ルーズ」のそれぞれの長所と短所を対比的に説明している。まとめ（形式段落 ）では、画面でも紙面でも「アップ」と「ルーズ」が使い分けられており、相手や目的に応じて取捨選択されていると述べられている。問題提起も説明も、対比的説明を受けてそれをまとめるという構成になっており、全体構成も と を受けて でまとめるという構成になっている。したがって、文章構成が分かりやすく、段落相互の関係を考えながら読みを深めていくことに適した教材である。

また、小単元「文と文のつながり」は、順接と逆接の接続関係を中心に取り上げることで、接続の意味を考えさせるようになっている。本教材で取り上げる、「だから」（順接）、「しかし」（逆接）といった接続関係が、文と文をつなぐ場合の論理的关系にあることに注目させるためにはうってつけである。また、三年下巻で児童が学習してきた文脈の中での指示語の用法も、接続関係に密接に関連している。説明文の学習においては、段落相互の関係を考えるために、接続語や指示語に着目させることから、説明文「アップとルーズで伝える」の学習において、言語事項の単元「文と文のつながり」を組み込むことで、両単元の学習を生かすことができる。

(2) 児童観

児童の実態把握のための事前調査によると、「国語の学習は好きですか」という質問に対し、「好き」「どちらかといえば好き」と回答しているのが54%、「どちらかといえば嫌い」「嫌い」があわせて46%と、約半々に分かれている。前者の理由として、「音読するところが好き」「漢字を書くことが好き」「漢字は苦手だけど、物語や説明文が好き」という理由があげられ、後者の理由としては「漢字や作文を書くのが苦手」「漢字を書くのは好きだけど文章問題が苦手」「漢字がわからない」等の理由をあげている。文章の内容に関わる理由よりも、日頃使われる漢字や作文に抵抗感を感じている子が多いことが分かる。

しかし、「国語の学習は、普段の生活の中で役に立つと思いますか」という質問では、「とても役立つ」75%、「まあまあ役立つ」25%と、肯定的な回答で占めている。その理由として、「漢字の読み書きができるようになる」「日記や文章を書くのに役立つ」「大人になっても使うから」等があげられている。多くの児童が国語の学習に苦手意識はあるが、普段の生活に役立つと認めていることが分かる。

また、学力面の結果を見てみると、1学期に行った「既習の説明文のテスト」は、平均91点に対して、「チャレンジテスト」では、平均61点という結果であった。ミニテストによる実態調査では、「文の構成が分かる」56%、「主語・述語の関係が分かる」56%と、共通して低い結果となっている。接続語の問題では、「順接」80%という結果であったが、誤答には「なので」を使った子が多かった。

このことから、説明文の授業での言語事項の指導においては、接続語の正しい理解にあわせて、主語・述語の関係や文の構成等についても重点的におさえる必要がある。

(3) 指導観

まず、文章全体をスムーズに音読できるように、新出漢字や意味の分からない語句は、漢字ドリルや国語辞典を活用し定着を図るようにする。説明文に必要な用語もここで押さえておき、常時教室掲示しておく。

学習指導を行う際は、言語事項を中軸とした展開を図っていく。例えば改行のない文章から、段落の必要性を理解したり、主語・述語の照応による要点まとめへのつなぎ、指示語の使用による文章の明快さ、そして、接続語の役割や働きから、文相互や段落相互の関係を理解させたりする等、授業の中で言語事項を押さえながらの説明文の読み取りを行っていきたい。

また、作者の考えを読み取らせる場面では、グループで話し合いの場を設け、相互交流をすることにより、児童の読む力を深めていきたい。

本学級の児童の実態を考え、それぞれの単元のねらいをより効果的に実現させるため、言語事項教材と説明文を関連させた単元構成を工夫し、指示語や接続語等の言語事項の重点化を図った学習の取り組みを行う。

(4) 評価観

本研究における評価は、下記の五つの観点に基づいて行う。その際、特に「関心・意欲・態度」の評価については、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」及び「言語事項」の内容と関連させて見取ることとする。評価方法として、行動観察や発言、ワークシート、振り返りカード、事前・事後テストなどから総合的に行う。

関心・意欲・態度	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと	言語事項
<ul style="list-style-type: none"> ・アップとルーズの伝え方に関心を持ち、説明文と言葉についての学習の見通しを持つようとしている。 ・各時間の学習課題に、自分の力で取り組もうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習した課題について、自分の考えたことを話している。 ・話し手を見たり、内容や中心に気をつけたりしながら聞いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教材文について、初めて知ったことや調べてみたいことなどを書いている。 ・接続語や指示語を使った文を書いている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内容の中心がよくわかるように音読している。 ・文や段落相互の関係を考えながら読んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文中における主語と述語の関係が分かる。 ・指示語や接続語は、文と文をつなぐ役割や働きがあることが分かる。

5 単元の指導計画と評価計画(10時間)

時	主な学習活動	指導上の留意点	重点言語事項 ・言語活動	学習 形態	評価規準				
					関	話聞	書	読	言
1	初発の感想を書いてみよう 学習への興味関心を持つ。 ・題名と作者を紹介する。	アップとルーズの写真を見せ、「分かること」「見えてくること」などを発表させる。 初発の感想を書き、発表させる。 説明文の読み方を確認し計画表で学習の流れを確かめさせる。	音読 感想 学習計画表	一斉 個人 グル ープ 一斉					
	「アップとルーズで伝える」を読み、感想を交流する。 学習の見通しを持つ。								
2	調べてみよう!言葉の意味を 形式段落に分ける。	改行の無い文章とある文章を比較させ、どちらが読みやすいか気づかせ段落の意味を理解させる。 辞書で意味調べをし、付箋紙をつけさせる 指示語・接続語・要点・主語・述語等、用語の意味を短冊に書いて掲示しておく。	改行 言葉の意味 用語の意味	一斉 グル ープ					
	言葉の意味を調べる。 用語を確認する。 (説明文に必要な用語の意味を知る)								
3 ・ 4	主語・述語の関係	主語と述語の関係を確かめさせる。 キーワード(文章の中の大切な言葉で繰り返し出てくることが多い)に着目させる。 本文から主語述語を探し大事な言葉を落とさず内容を読み取らせる。 主語・述語を使った短文作りをさせる。	主語・述語 [活用]	一斉 個人					
	主語・述語の照応を理解する。 キーワードや中心となる文を探し、サイドラインを引く。 の段落から見つける。 主語・述語を使って短文作りをする。								
5	文と文をつなぐ接続語 接続語の役割や使い方について理解する。	『文と文のつながり』で、順接・逆接の接続語の役割や使い方を理解させる。 いろいろな接続語があることを理解させる 接続語が文と文をつなぐ働きをしていることを実感させる。	接続語	一斉 グル ープ					
	接続語ゲームをする。								

6 (本時)	接続語の働き	<p>順接・逆接の接続語を本文の中から探す。 「でも」「しかし」に着目してアップとルーズの長所・短所に気づかせる。 接続語に着目すると段落相互の関係を捉えることができることに気づかせる。 接続語を使った短文作りをさせる。</p>	接続語	一斉					
	<p>それぞれ段落内の接続語に着目しアップとルーズの長所・短所を理解する。</p> <p>段落と段落を対比させて説明し、段落でまとめるという書き方の工夫に気づく。 接続語を使ってお話を作る。</p>								
7	こそあど言葉の役割(指示語)	<p>指示語の使われる意味を理解し、指示語の使い方を考えさせる。 指示語にも文と文をつなぐ働きがあることを再確認し、本文の中から探させる。 指示語や接続語を使った短文作りをさせる。</p>	指示語	一斉					
	<p>指示語にも文と文をつなぐ働きがあることを再確認する。 の段落から探す。</p> <p>指示語や接続語を使った短文作りをする。</p>								
8・9	筆者の工夫をさぐろう	<p>段落の必要性について話し合わせ、筆者の考えに目を向けさせる。 相互交流を行い、考えを伝え合う中で、他者の見方・考え方にふれさせ学習に深まりを持たせる。</p>	書く 話す 聞く	個人					
	<p>段落の役割を考える。 筆者の考えをとらえる。 自分の考えをまとめる。 相互交流をする。</p>								
10	学習のまとめをしよう!	<p>文章全体を振り返り、段落相互のつながりを要点や接続語及び4～8時までの学習を手がかりにまとめさせる。 伝える目的や相手に応じて、情報の材料や選び方や表現方法が異なっていることに気づかせ、自分が情報を発信する際に生かせるよう発信する側に立って考えさせる。</p>	文章構成	一斉					
	<p>学習をまとめる。 全文から、段落のつながりを想起しながら、文章全体の構成をまとめる。</p> <p>次は自分が発信者になることを知る。</p>								

6 本時の指導(6/10)

- (1) 題材名 「文と文、段落と段落のつながりを考えよう」
- (2) 本時の目標
接続語の働きや使い方について理解を深める。
- (3) 本時における重点言語事項 【接続語】
- (4) 授業仮説
導入の場において、段落のない文章を読み段落のまとまりを考えさせることにより、文と文、段落と段落のつながりを意識して読むことができるであろう。
文と文、段落と段落をつなぐ場面において、接続語を使ったゲームをしたり短文作りをしたりすることにより、接続語の役割や使い方について理解を深めることができるであろう。
- (5) 準備
拡大した本文と写真、接続語の一覧表、学習計画表、ワークシート、振り返りカード
- (6) 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	形態	評価規準・評価方法	準備
導入	1. の段落のない文章を読み、どこで段落を分けるか考える。 2. 本時のめあてを知る。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">接続語の働きを確かめよう</div>	段落のまとまりを考えながら、文章を読むための手だてとしたい。 ・時間を決める。	一斉	【関・意・態】 段落のまとまりを考えながら読んでいる。 (行動観察・発言)	・改行のない本文(児童用) ・拡大した本文と写真(板書用)
展開	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">本文から接続語をさがしてみよう。</div> 3. 本文から接続語を見つけ、四角で囲む。	本文から接続語を探させる各自読みをさせる。	個人	【言語事項】 接続語の働きを確かめようとしている。 (行動観察・発言) 接続語は文と文をつなぐ役割や働きがあることを理解している (行動観察・発言・学習ノート)	ワークシート
	4. 接続語の働きを確かめる。 ・文と文をつないでいる接続語があることに気づく。	段落の「しかし」、段落の「でも」に着目させる。 接続語は文と文をつなぐ働きがあることを再確認し、つなぐ言葉によって後に続く文が分かることを確かめさせる。	一斉		
	5. 短文作りをする。 6. できた作品を紹介し合う。	接続語を使った自作の短文を作らせる。 ペアで作品を紹介し合い、全体の場で発表させる。	個人 ペア 全体	【書くこと】 接続語を使って短文を作っている。	短文作りシート
まとめ	7. 本時を振り返る。	本時の学習内容を確かめ、振り返りカードに自己評価と感想を書かせる。	個人	学習の振り返りと感想が書けている。	振り返りカード

(7) 評価

- 接続語の働きを理解することができたか。
 接続語を使って文と文をつなぐことができたか

(8) 掲示資料

説明文の学習に役立つ用語と用語の意味を常時教室に掲示し活用する。

説明文の学習用語

学習用語を覚えて、説明文を読み取る力をつけよう！



5W1H	いつどこで だれが なにをした なせ / どのよう
文末表現	「です」「だからです」など、文の終わりの表現
指示内容	指示語の指し示す言葉や文
指示語	何かを指し示す語 (表を参考)
接続語	言葉と言葉、文と文、段落と段落をつなぐ語 (表を参考)
主語 述語	主語…何が「だれが」「何を」 述語…「どうする」「どんなだ」「何だ」にあたる言葉
要点	中心文の中の重要な点をまとめる。
中心文	段落の中で一番大切な文。
キーワード	文章の中の大切な言葉。繰り返し出てくる事が多い。
意味段落	いくつかの段落が集まった意味のまとまり。 <small>書き出しが一字下げになっている</small>
形式段落	いくつかの文が集まった意味のまとまり。
答えの文	「である」「です」「なのである」 <small>文末表現をつけよう。</small>
問いの文	「でしょうか」「でしょう」

他の説明文を読む
ときにも役立てよう。



場合	使い方	接続語
順接	前のことながら原因理由となり、その当然の結果が後にくる場合	だから すると それで そこで したがって ですから
逆接	前のことながら対立するようながら、それが後にくる場合	しかし でも けれど だが けれど ところが
追加	前のことさらに新しいことがらをつけ加える場合	また ならびに そして それから さらに
転換	話題をかえる場合	さて ところで では ときに
説明 まとめ	理由や説明をおぎなう場合 まとめる場合	なぜなら たとえば つまり すなわち このように

接続語つなぎ言葉(のはたらき)

言葉と言葉、文と文、段落と段落をつなぎ、前後がどんな関係であるかを表す語を接続語と言います。

7 検証授業研究

(1) 授業者の反省

これまで、言語事項を中心に説明文の学習を行ってきた。しかし、既習の言語事項においても忘れていくことが多く、実際予定していた授業時数より増えている。限られた時間内で進めるような手だてを工夫する必要性を感じた。

児童は、自分にあったペースで目標を持って一人読みに取り組むことができた。

導入で、児童に段落のまとまりを見つける学習作業を通して、本時の学習内容である段落を文と文や段落相互の関係を意識して読み、その読み深めたことが、接続語の働きを確かめるときに役立つことを予想していた。しかし、教師の予想する力の足りなさ、指導内容、時間の配分がしっかりできなかったことが原因で本時の授業が目標に達していかなかった。今回の授業実践の課題がこれからの実践に生かせるよう意識を高め、本時で残された学習内容を次時でしっかりおさえていきたい。

(2) 意見及び感想

短冊を準備すると児童の答えがすでに用意されていると正解しかない答えになる。授業の流れが残るような板書の工夫や資料の使い方が必要である。

個人指導を要する児童への手だても準備しておき、全員が参加できる授業作りを心がけてほしい。

発問を工夫するともう少しスムーズに進めたと思う。段落のまとまりを で囲むとき悩んでいる児童がいたので、改行の記号を付けるという方法が良いと思う。

授業の流れが導入から展開に移るときのつながりを持たせるように工夫すると良かったと思う。児童らは授業後「頭が痛くなるほど考えた。楽しかった。」と言っていたので、児童の側からすると今日の考えさせる授業は楽しいと感じるものであったようだ。

Q 段落のまとまりを見つける学習作業はとても難しく1時間かけて扱う内容ではないか。児童は、どれくらい内容が把握できていたのか疑問であった。

A これまでの授業においても段落を意識して読むように心がけてきた。本時の授業では、一人読みで段落のまとまりを探すことにより、自分に合ったペースで目標を持った本読みができると考えていたが、本時の導入に必要なだったか、また、時間をかけすぎたところは反省である。

(3) 指導助言(沖縄県立総合センター主任指導主事 吉浜 幸雅)

学びのプロセスとして問いと答えの間を十分にとる事が大切である。

足跡を残していくことで間違いと正しさが分かる。すぐに正解を教えてしまったら、児童はできた気になる。間違ったところは消さずに、なぜ間違ったのかを考えさせることが大切である。自分の誤ったことが分かるまでは、正しい答えは書かさない方がよい。

定着が弱ければ即座にフィードバックすることが学力の保障である。

授業時間の中においても社会で生きぬいていく児童を育てること。「堂々と前に出てくる児童」「自信を持って発表する児童」「自信はなくても発言できる児童」をどう育てるかを意識して国語の授業の中で日々言葉の力をつけ社会で生き抜く力を育ててほしい。

仮説の検証

研究の基本仮説について、児童の行動観察やワークシート、自己評価、児童の感想、検証前後の実態調査等をもとに検証する。検証授業を行うにあたり、指導計画全 10 時間の授業仮説を以下のように設定した（表 6）。授業仮説に基づき、2 つの具体仮説について分析・考察を行う。

表 6 本単元における各時間の授業仮説（実線を検証する）

単元名	「アップとルーズで伝える」 文と文をつなぐ言葉の働きを考えながら -
第 1 時	アップとルーズを考える場面において、身近にあるアップとルーズの写真を見ながら「分かること」「見えてくること」を発表させることで、興味関心を持って教材文を読み、初発の感想を書くことができるであろう。
第 2 時	文章の読みやすさを考える場面において、改行のない文章のある文章を比較することにより、段落の大切さに気づき、形式段落の意味を意識して分けることができるであろう。
第 3 時	主述の関係を考える場面において、主語のない文とある文を例題とし、主述の関係を確認したり短文づくりをしたりすることにより、主語は述語に対応していることが理解できるであろう。
第 4 時	
第 5 時	文と文、段落と段落をつなぐ場面において、接続語を使ったゲームをしたり短文づくりをしたりすることにより、本文の中で使われる接続語の役割や使い方について理解を深めることができるであろう。
第 6 時	
第 7 時	文章の読みやすさを考える場面において、指示語の使い方が不適当な例文を読み、違和感に気づかせることにより、指示語の果たす役割を理解することができるであろう。
第 8 時	筆者の考えをとらえる場面において、一人一人がワークシートに筆者の名前を書いて相互交流を行うことにより、多様な他者との考えに出会い、筆者の論理や考えを読みとることができるであろう。
第 9 時	
第 10 時	言語事項を中心にして読み取ってきたことをまとめることにより、文章全体の構成を理解し、学習内容の定着を図ることができるであろう。

具体仮説
「文章や段落の確かな読み取りが行われ、文や段落相互の関係やつながりを考えながら読む」ために行った言語事項を中心とした取り組みをもとに分析・考察を行う。

具体仮説
「相互交流を行い多様な他者との考えに出会う」ために行った取り組みをもとに分析・考察を行う。

1 具体仮説 の検証

< 具体仮説 >

文や段落相互の関係をとらえる場面で言語事項の意味や用法を具体的な文章の中で重点的に扱うことにより、文章や段落の確かな読み取りが行われ、文や段落相互の関係やつながりを考えながら読むことができるであろう。

(1) 主語・述語の照応における読み取りの検証(第 3 時・第 4 時)

事前テストの結果から、主語・述語は当該学年の一単元のみでの学習では十分定着が図れたとは言えない現状である。そこで、既習事項の主語・述語の言語事項を説明文の学習の中で取り上げ、導入で主語のある文とない文を取り上げて違いに気づかせる展開を行った。主語を意識した児童は半数で、どちらかというとなり修飾語が多く使われている文の方が良いとした児童が半数であった。そこで、主語・述語の重要性を確認し、主語の省略されている文章や文節の区切りを押さえ、述語を手がかりにして主語を見つける方法を知らせることで、主語がはっきりすることを確認した（図 2）。苦手意識を示した児童がいたことから、主語・述語ゲームを行い楽しく学習をする体験をさせ、朝の自習時間に個人指導を行った。また、プリントの宿題で翌日、点検をしながら定着を図った（表 7）。しかし、実際、本文の中から主語を探す活動では、述語は比較的探し出すことができたが、主語については的はずれな解答が見られた。そこで、事前に学習した主述の照応を振り返り、見つけた述語を手がかりとして主語を探した。児童は、主語・述語をおさえると

その段落に何が書かれているかが分かり、確かな読み取りができることを理解したようである。しかし、複雑な長文の中から自力で主述を見つけることは十分とは言えない状況であり、今後も継続指導が必要な言語事項であると感じた。その取り組みとしては、主語・述語は単に定義を押さえるだけでなく、本文の中で意識を持たせる活動場面を設定したり、日常生活でも主語・述語を意識して会話をしたり日記を書いたりすることにより、主述の照応についての活用力が身についていくのではないかと考える。

表7 児童の感想

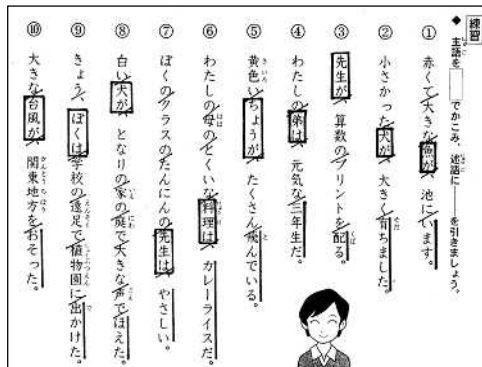


図2 主語・述語に係る掲示資料

主語と述語の関係が分かってよかったです。
主語と述語の探し方が分かりました。
述語の方が見つけやすいと思いました。
主語は、述語が分かれば簡単に見つけられました。
主語と述語は覚えていると思ったけど結構忘れていました。今日の授業で思い出すことができよかったです。
日記や作文にも生かして、主語と述語を完璧にしたいなと思いました。
説明文の中にも主語・述語が使われていることが分かりました。
説明文の学習でも主語と述語の見分けが大切だと思いました。
主語と述語は大切なのだと気づきました。これから主語・述語を意識して使うようにしたいと思います。

(2) 接続語の役割や使い方の理解についての検証(第5時・第6時)

接続語のゲームの有効性

接続語の役割や使い方の理解を図る場面で、グループごとに多種の接続語カードを配り、出てきた接続語を使って次々に文をつなげていくというゲームを取り入れた。教科書の学習のみでは、なかなか定着しない言語事項をゲーム感覚で楽しく活動させることにより接続語の働きを体験することができた(写真1)。また、グループで取り組むことで、多くの接続語を使った短文に出会い、個人では思いつかなかった新たな発想が獲得でき言語の感覚が広がってきた。ゲーム後の児童の声から、「接続語を使うとこんなに話がつながるとは思わなかった」「接続語を使うと、おもしろい」等のつぶやきや感想が聞かれた(表8)。児童は接続語を使うと文と文がつながり、話が発展していくことを実感としてわかったようである。

表8 児童の感想

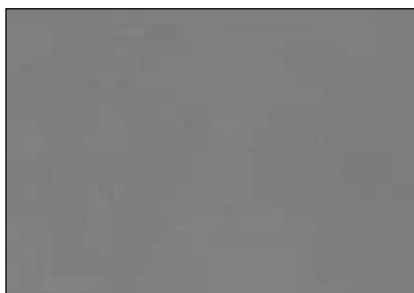


写真1 接続語ゲームの様子

簡単そうだったけど意外と難しかったです。
最初は意味が分からなかったけどだんだん話がつながってきてももしろかった。またやりたかったです。
上手く話がつながってうれしかった。
グループみんなでやったから分かりやすかった。
最初は話がつながっていたけど後からつなげるのが難しくなって、でも何とかつなげることができました。またやりたいです。

短文作りの有効性

グループで接続語のカードゲームをした後、個人で短文作りを行った。グループで文作りを行った後であるため、個人で短文作りに取りかかることが容易になり、興味をもって取り組むことができた。実際、できた短文を読んでみると、個人差はあるがそれぞれが接続語の使い方を理解し文作りができてきた(図3)。完成した作品を紹介し合うことで、接続語ゲームと同様、他者の考えに触れることができ新たな発想を習得することができたようである。

手だてとして、常時「接続語の種類と働き」を掲示することで再確認することができ、定着

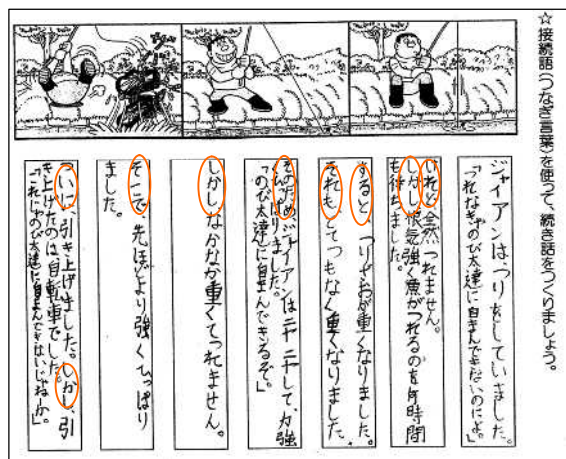


図3 短文作りのワークシート

が図られたと考える。実際、本文の中から、接続語を見つけたとき「接続語があれば文の続きが予想できる」「接続語の働きが分かると便利」等の感想があり、文章の中で接続語が文と文をつなぐ大事な働きをしていることを理解したようである。

このことから、短文作りのような書く活動や接続後ゲームのようなグループで話を膨らませていく体験は、文と文のつながりを考えていく学習には有効であると考えられる。

(3) 指示語の役割を意識した読みの検証(第7時)

「指示語」の指導は、前学年の既習事項である。しかし、指示語を使わずに同じ言葉や同じ文が繰り返されている不適当な例文を提示しても、初めは違和感に気づかない児童がほとんどであった。そこで、既習のこそあど言葉の問題を2, 3問行い、もう一度、指示語の不適当な例文を読ませたところ、「文がおかしい!」「こそあど言葉が使える!」等と児童に気づきが見られた。そこで、指示語の性質として繰り返しのくどい表現が避けられることや、文章がすっきりと読みやすくなることをおさえた上で、本教材の本文の中から指示語を探す活動を行った。実際、指示語を見つけることはできるが、指示内容がどれなのかがはっきりしない児童がいた。指示語の指し示すものは、大体その前にあることをヒントにペアで話し合わせ全体で確認を行った。指示語の果たす役割を理解することで文章の内容も理解できることを感じたようであった。また、こそあど言葉を使うと文章が分かりやすくなる働きや良さを確認するために、実際に短文作りを行った。絵を見ながら作らせたことで、児童にとって取り組みやすいものとなり、意欲的に短文作りに取り組み比較的すぐに書き終えることができた。しかし、できた文を読んだところ、近くの物を指し示している場面で「あれ」を使った児童や生き物に「それ」という表現をした児童がいたため全体で指示語の働きや用法について再確認した。

児童の学習後の感想や振り返りカードから、指示語は文章を読み取る上でも重要な働きをしていることに気づいたようであった(表9)。既習の知識・技能を単元間、学年間で繰り返し生かすことの意義と常に本文に立ち返ることの重要性を再確認することができた。

表9 児童の感想

こそあど言葉を覚えたら、本を読む時などに何を指しているかが分かる。
長い文を何回も書かなくても「それ」とか「その」とかで短い文が書けるので便利だと思う。
指示語は長い文を短くして分かりやすくしているのが良いと思います。これから、指示語を使ってみたいと思います。
指示語を使うと文が分かりやすくなるといういい働きをしているし、何を指しているのかが分かると読むのも楽です。
「アップとルーズで伝える」の中から指示語を見つけることができました。
文章の中から指示語が指していることを見つけるのは難しかったです。

(4) 段落のまとまりを意識した読みの検証(第2時)

教科書の中で扱う形式段落に番号をつけることは、ほとんどの児童ができる。しかし、作文の実際の場になると、段落を意識して書いている児童は少なくなる。そこで、この学習で、はっきりした段落意識を持たせたいと考えた。

はじめに、改行のある文章とない文章を見せ、どちらが読みやすいか比べることで、段落の意味に気づかせた。文章は、もともといくつかの段落から成り立っており、それらの段落は、一つ一つでまとまった内容を持っている事を確認し、教材文の「アップとルーズで伝える」ではいくつかのまとまりからできているか形式段落に番号をつけさせた。本単元ではそのまとまりを意識しながら本読みを行うようにした(表10)。実際、改行のない文章を見て、どこで段落分けをしたらよいか全員が把握しているとは言えないが、段落のまとまりを気づかせることによって文と文、段落と段落のつながりを意識して読む事ができるようになってきた。

表10 児童の感想

段落がないと話の内容が違ったとき意味が分からないので、段落は欠かせないことが分かりました。
本を読むとき段落を見てるけど話が変わった感じはあまりしないので感じるようにしたいです。
段落の意味をちゃんと知ることができてよかったと思いました。
段落がないと文の内容がわからなくなったり、伝えたいことが人に伝わりにくいことが分かりました。
これから日記や作文を書くとき段落に気をつけていきたいと思いました。

2 具体仮説 の検証

< 具体仮説 >

筆者の考えをとらえる場面で、一人一人がワークシートに筆者の考えを書いて相互交流を行うことにより、多様な他者との考えに出会い筆者の論理や考えを読み取ることができるであろう。

< 一人読みとグループ読みによる活動の検証 > (第8時・9時)

筆者の考えを読み取る場面は、まず6段落の二文を読み返し、テレビにおけるアップとルーズの使い分けについて考えた上で、7段落で話題が新聞に移っていることを確認した。そして、8段落で筆者の伝えたいことがまとめられている事を理解しながら読み進めてきた。そこで、文章の内容をおさえるだけでなく、文章の書かれ方について考えさせることにより、筆者の論理や考えに迫り、文章の読み取る力が育っていくと考えた。

本時の話し合いでは「筆者の中谷さんはどうして7段落に新聞の説明を入れたのだろう」という発問をなげかけ、自分の考えをワークシートに書き、グループによる話し合いを入れ、筆者の考えとつなげて多様な考えがでるようにした。

一人一人が自分の考えを書く場面では、これまでの学習を振り返り、本文を始めから読み返す活動が活発化し、総合的に考えている様子が見られた。そして、一人一人が、自分の考えたことをワークシートに書くことができた(表11)。

相互交流の場面では、一人一人が考えてきた意見を真剣に聞こうとする意識が高まっていることから、自分の考えと比べながら他者の考えに触れることで、「なるほど!」「みんなのいろいろな考えが聞けて、良かった。」等の感想がでてきていた(表12)。また、自分の考えがうまく伝わらないとき、グループでは「つまり～と言いたいのかな」等と考えをうまくまとめていく場面も見られ、互いに学び合っている様子がうかがえた(写真2)。

よって、相互交流の場を持つことは、筆者の考えを多面的にとらえる面で有効であるといえる。さらに、書かれていない部分まで読み深める姿から「読解力」が育ってきたと言える。

表11 筆者の工夫を探る児童の考え

身近な新聞の説明もすることによってアップとルーズのことを考えてもらえるように新聞の事例を書いたのではないかなと思う。
受け手が知りたいことは何か、送り手が受け手に伝えたいことは何かをわかりやすく教えるために、新聞はテレビほどくわしく書かれてないけど入れたんだと思う。
新聞もテレビもアップとルーズで伝えている事を気づいてほしい。
どちらも目的が一番合うものを選んで使うようにしているから、新聞はテレビほどくわしく書かれていないと思う。

表12 相互交流後の児童の感想

みんなのいろいろな考えがあって分かったことが3つも増えました。
友達の考えで意味が分からないものがあったけど、説明をしてくれたので分かりました。
グループのみんながそれぞれ違う考えをもっているんだなと思いました。
自分と違う意見があったので面白かったです。
Kさんの考えがなるほどと思いました。



写真2 相互交流の様子

このように、本文の「アップとルーズで伝える」の内容を詳しくとらえるだけでなく、文章の書かれ方について思考力を駆使して文章構成等の理解に迫っていく力を育てることは今後の読む学習活動でも生かされていくと考えられる。

3 事前・事後の実態調査結果から

本研究の手だてによって、児童の言語事項に関する力や読解する力がどのように変化したかについて事前・事後の総合的な視点からの調査項目をもとに比較・分析した。

図4の言語事項の実態調査から、既習の主語・述語や指示語、順接・逆接の接続語等のほとんどの項目について、事後に正答の上昇が見られた。逆接の接続語の問題においては、「しかし」「でも」「けれども」「だが」等と使われる接続語の種類が増えた。主語・述語の問題においても、事後は的はずれな間違いではなく、主部や述部を書く等の誤答であった。

図5は、読解力を見取る観点と関連のある市販の「読む能力」テストを使って比較・調査したものである。単元テストは、事前・事後とも平均90点に達している。単元テストと同レベルの未習の説明文のテストにおいては、事前は平均61点に対して事後は平均80点となり、正答率が約20ポイント上昇しており読解する力が高まってきたと考える。これは、児童が主語・述語や指示語、接続語等を関連させた説明文のこれまでとは異なった学習方法により、言語事項の重要性に気づき(表13)未習の説明文においてもこれまで学習してきた言語事項の知識が活用されたのではないかと考えられる。

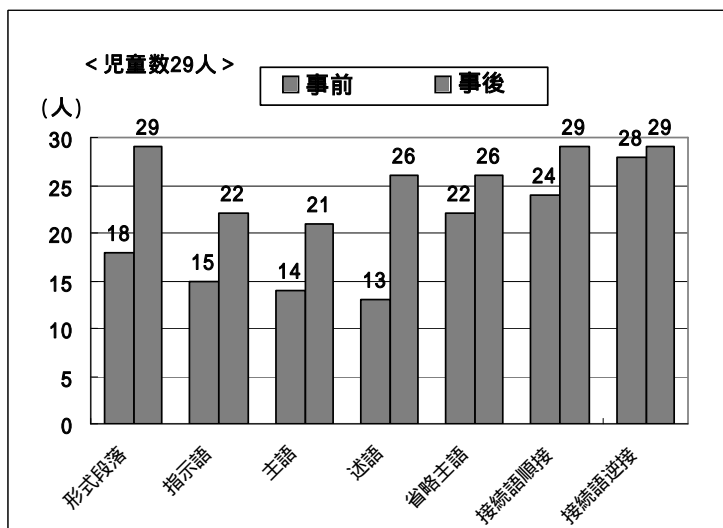


図4 言語事項に関する事前・事後の比較

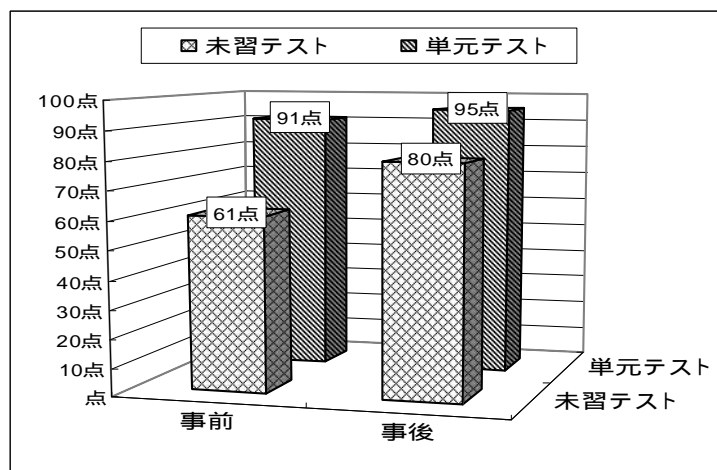


図5 「読む能力」テストの事前・事後の変容

表13 児童の感想(学習後)

主語や述語、接続語など、アップとルーズで習ったり、復習したりしたことをいろいろなことに使っていくようにしたいと思います。
 これからは、日記や作文に接続語や指示語などを使うようにしたいと思います。
 接続語・指示語・主語述語・段落キーワードがとても大切だと思いました。
 段落を使って作文を書けるようになってきました。
 これから、いろんなところで指示語や接続語を使っていきたいと思います。他の文章でも段落を見つけたり、キーワードを見つけたりしたいです。
 私は、主語述語があまり分からなかったけどできるようになったから、うれしかったです。とてもがんばってできました。
 段落、主語述語、接続語、指示語、キーワードがわかるようになりました。しかも、そうなることで、文がうまく書けるようになりました。これからも、それらを使い文を上手に書こうと思います。

以上の実態調査の結果や児童の感想から、研究の仮説に基づく授業実践を行った結果、児童の言語事項への関心が高まり、具体的な文章の中でも言語事項に着目し読解する力が育成されてきた。また、学習したことを日記や文章などで使うなど実生活に生かそうとする意識が見られることから生きて働く言語力として読解する力が高まると考える。このことから、説明文の学習において、言語事項の重点化を図った取り組みは、説明文の学習目標の到達や言語事項の理解を図る上で有効であったと考える。

研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

- (1) 説明文の学習を通して、文や段落相互の関係やつながりを考えながら読むことができるようになってきたことから、指示語や接続語等の言語事項の意味や用法を具体的な文章の中で重点的に扱いながら読み取る力をつける学習指導を行うことは効果性が大きいといえる。
- (2) 筆者の考えを読み取る場面において、多様な他者との考えに出会い書かれていない部分まで読み深めることができたことから、児童一人一人が自分の考えをワークシートに書いて相互交流を行うことで筆者の考えを読み取ることの有効性が明らかになった。

2 今後の課題

- (1) 学習課題の追究時や言語事項の活用を図る際のより効果的な学習形態や発問を工夫する。
- (2) 言語事項と説明文を関連させる際のより計画的・系統的・継続的な単元構成を工夫する。
- (3) 読解力を育成するための学習指導の工夫及び授業の改善をする。

3 おわりに

10月からの半年間、落ち着いた環境の中で研究を進めることができ、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。本研究では、国語科で課題としていた読解力を育成するための理論研究を深め、理論を基に実践していく中で数々の課題と向き合いながら一步一步、検証を進めていくことができました。本研究を通して多くの学びがあり、これまでできなかった貴重な経験を積むことができました。

このような研究の機会を与えて下さいました宜野湾市教育委員会の諸先生方、常にやさしい言葉で励まして下さいました宮城盛雄研究所所長、研究の進め方や報告書のまとめ方を丁寧に指導して下さいました田場勝研修係長、検証授業の助言をして下さいました長田小学校の横山芳春校長、あたたかく応援して下さいました外間昭賢教頭ならびにいろいろご協力下さいました長田小学校の職員の皆様に心から感謝申し上げます。

また、本研究を進めるにあたり、沖縄県立総合教育センターの吉浜幸雅主事には、テーマ設定の段階から深く研究に関わって頂き、懇切丁寧なご指導とご助言を頂きました。特に教育論については熱く語っていただき今後の教師としてのあり方など多くのことを教えていただきました。数々の指導助言を下さいましたことに深く感謝申し上げます。

最後に、共に研究に励み、励まし合い、様々なことを共有し合った同期研究教員の先生方、はごろも学習センターの皆様にも心よりお礼申し上げます。有り難うございました。多くの皆様のお力添えで研究を進めることができましたことに深く感謝申し上げます。

<主な参考文献>

文部科学省	『小学校学習指導要領解説国語編』		平成20年
田中孝一・小森茂著	『「読解力」で授業をかえる』	ぎょうせい	2008年
鶴田清司著	『「読解力」を高める国語科授業の改革』	明治図書	2008年
瀬川榮志著	『国語科基本用語』	明治図書	2007年
堀江祐爾著	『国語科授業再生のための5つのポイント』	明治図書	2008年